

修士論文（要旨）

2013年1月

女性定年退職者の退職後のキャリア選択要因

— 一定年退職前のキャリアとの関連について —

指導 杉澤秀博 教授

老年学研究科

老年学専攻

211J6008

川内由加

目次

1. 諸言	1
1) 研究の目的	1
2) 先行研究のレビュー	1
3) 研究の実践的意義	1
2. 研究方法	1
1) 調査対象	1
2) 調査方法	1
3) 分析方法	1
4) 倫理上の配慮	1
3. 結果	1
4. 考察	2

参考文献

1. 諸言

1) 研究の目的

本研究の目的は、定年退職後、系列企業以外での就業(転職または起業・自営)というキャリアを選択したホワイトカラーの女性を対象に、質的調査を行い、定年退職前のキャリアとの関連において、定年退職後のキャリア選択に影響を与える要因を明らかにすることにある。

2) 先行研究のレビュー

定年退職後のキャリア選択要因やその後の仕事に対する満足度に関して、男性についての調査・研究はいくつか行われているが、女性については殆ど行われていない。

3) 研究の実践的意義

本研究の実践的意義は、1986年の雇用機会均等法の施行から26年が経過し、今後、増加することが予測されるホワイトカラーの女性定年退職者のキャリア選択における問題提起や支援および、企業側の人的資源管理についての示唆を得ることができるものと考えられる。

2. 研究方法

1) 調査対象

対象者は、定年退職後、系列企業以外での就業(転職または起業・自営)を選択したホワイトカラーの女性6名である。

2) 調査方法

半構造化された質問紙による個別面接法で実施した。調査期間は、2012年8月～9月である。

3) 分析方法

分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)¹⁾である。分析テーマは、「女性定年退職者の退職後のキャリア選択要因が形成されるプロセス」であり、分析焦点者は、「定年退職者後、系列企業以外での就業(転職または起業・自営)というキャリアを選択したホワイトカラーの女性」とした。

4) 倫理上の配慮

桜美林大学倫理委員会の承認を得た上で、必要な配慮を行った。

3. 結果

本研究では、定年退職後、系列企業以外での就業(転職または起業・自営)というキャリアを選択したホワイトカラーの女性の場合、その要因として、定年退職前のキャリアとの関連において、以下の3つの特徴が見られた。

一つ目は、既婚、未婚、子供の有無関わらず、現役時代は、仕事にのめりこみ精神的にも時間的にも仕事優先の人生を選択していた。その上で、定年直前ではじめて退職を意識すると、現役時代を評価し、やりきった感としての強い自己肯定感を持っていた。この背景には、自分の有用感、仕事の適合感、財産となったつながりとしての人間関係がある。一方で、このままのやり方で仕事優先の人生を続行するのは精神的にも身体的にも困難である、もしくは続行すべきではないという思いを得ていた。この背景には、組織における自分の位置づけや役割、心身のバランス、家族との関係において変化が起きているという現状を、冷静に認識する機会を得たことがある。これらにより、雇用延長や再雇用など系列企業での就業を選択することなく、企業側から与えられた外発的要因としての定年という機会

を活用し、一旦、仕事優先の人生に区切りをつけ、人生を軌道修正していた。

二つ目は、定年退職により何が終わり、何が始まったのかという現実が起こっている事実と向き合った上で、改めて、内発的な動機として、定年退職後だからこそその仕事の目的を見つけていた。その目的とは、本当に好きな仕事だけの追求、仕事ならではの緊張感をほどほどに得ることによる充実感の確保、一企業の範囲を出た分野での有用感の確保である。この背景には、現役時代に経験した顧客への役立ち感や、困難を乗り越えて得て来た仕事ならではの達成感があった。また、現役時代には十分にできなかった地域社会活動や余暇活動にも意欲的に参加した上で、そこでは得られない仕事ならではの緊張感をもたらしてくれる目的も見つけていた。これらの仕事の目的は、系列企業での就業によっては成し得ることが困難なものであり、精神的にも身体的にも健康により影響をもたらすものであった。更に、長年に渡る適合度の高い仕事優先の人生を送って来たからこそ体感し得た仕事ならではの意味づけを持っているからこそ見つかったものであった。これが、改めて就業というキャリアを選択するという意欲につながっていた。

三つ目は、新たに見つけた仕事の目的を実現するために、必要な技能の確認と更新を行うと共に、就業実現のための機会を引き寄せる行動を起こしていた。この背景には、現役時代に身につけた技能への自信と共に、外部環境変化やつながりの重要性への認識があった。

以上の特徴より、本研究では、ホワイトカラーの女性の定年退職までの長期間に渡るキャリアが、定年退職後のキャリア選択要因として影響を及ぼしていることが明らかになった。

3. 考察

本研究の結果は、次の先行研究の知見、すなわち、田尾ら⁹⁾の「仕事の自信が大きいほど定年後の就労意欲が高くなる」、奥津⁹⁾の「定年後の職業生活を充実するためには仕事の中に価値を内発的に見出す能力が必要である」、奥津¹⁰⁾の「55歳以降の教育訓練が就業確率にプラスの影響を与える可能性がある」、徳田¹⁰⁾の「女性の定年退職後の再就業理由は内発的な動機が強い」を支持するものであった。尚、定年退職後、系列企業以外への就業を選択した要因の性別による差や、系列企業での就業を継続した人と系列企業以外への就業を選択した人との要因の差については、その先行研究の少なさからも限定が困難ではあるが、高木²⁰⁾の「企業における定年後の雇用継続の有無や環境条件設定の決定における目に見えない選抜の影響の存在との関係」を指摘する知見との比較より、内発的動機の有無または大きさおよび、定年退職前の組織との相互作用についての調査・研究が、今後、必要であるものと考えらる。

以上の研究の知見を現実におけるホワイトカラーの女性のキャリア形成プロセスに生かすとすると、次の2点の提案ができる。まず、定年をキャリアのゴールとして捉えるのではなく、定年退職後のキャリアという長期的視点を持ち、自分の定年退職までのキャリア形成を考える必要がある。次に、企業側も、定年までの長期間に渡る雇用関係が、定年退職後のキャリア形成要因に大きな影響を及ぼすことを念頭に置いた長期的視点に立った人的資源管理が必要である。

最後に、本研究においては、対象者が限定的であるため、結果の一般化には慎重である必要があることを指摘しておく。

参考文献

- 1.ノーマンC. ガイスバース/メアリーJ. ヘプナー/ジョセフA. ジョンストン:翻訳者 日本ドレーク・ビーム・モリン株式会社ライフキャリア研究所. 生産性出版, 11(2002)
- 2.金井壽宏:働くひとのためのキャリアデザイン. PHP新書 187, 141(2002)
- 3.ケン・ディヒトバルト:翻訳者 田名部昭/田辺ナナ子:21世紀の高齢社会 エイジ・ウェブ. 創知社, (1992)
- 4.ウィリアム・ブリッジズ:翻訳者 倉光修/小林哲郎:トランジション. 創元社, (1994)
- 5.高木朋代:高年齢者の雇用と引退マネジメント. 組織科学第 41 巻 2 号, 42-56(2007)
- 6.中馬宏之監修・キャプラン研究会編:中高年再就職事例研究. 東洋経済新報社, (2003)
- 7.黒澤昌子:中途採用市場のマッチング/満足度・賃金・訓練・生産性. 日本労働研究雑誌 No.499, 71-85(2002)
- 8.田尾雅夫/高木浩人/石田正浩/益田圭:高齢者就労の社会心理学. ナカニシヤ出版, 117(2001)
- 9.奥津眞里:定年後の働き方と対処行動ー働く人の知恵と工夫ー. 労働政策研究・研修機構 No.82. 75-106(2011)
- 10.高木朋代:高年齢者の就業と引退ー自己選別はなぜ始動されるのか. 日本労働研究雑誌 No.589, 30-42(2009)
- 11.奥津眞里:高齢者の就業実態に関する研究. 労働政策研究・研修機構No.137. 13(2011)
- 12.袖井孝子:定年退職ー家族と個人への影響『老年社会科学』10 巻 2 号, 64-79(1988)
- 13.岡本祐子:女性の生涯発達とアイデンティティ. 北大路書房, 88-89, 103(2002)
- 14.前田信彦:定年退職への移行と生活の質(Quality of life)ージェンダー比較分析ー 『立命館産業社会論集』 第 41 巻第 1 号, 124-126(2005)
- 15.徳田直子:女性定年退職者の退職後の楽しみ・生きがいー現役時代の経験との関連についてー. 桜美林大学大学院老年学研究科 老年学雑誌No.1 39-53(2010)
- 16.木下康仁:グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い. 弘文堂, 65(2003)
- 17.木下康仁:グラウンデッド・セオリー・アプローチ. 弘文堂, (2008)
- 18.木下康仁:ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法. 弘文堂, 29, 66-67, 223(2007)
- 19.国眼万里子:女性らしさと自分らしさの間で 岡本祐子・松下美知子(編) 女性のためのライフサイクル心理学. 福村出版, 91-112(1994)
- 20.高木朋代:高齢者雇用のマネジメント. 日本経済新聞出版社, 194, 295(2008)
- 21.大澤真知子:新しい家族のための経済学:変わりゆく企業社会の中の女性. 中公新書, (1998)